

# 近世東北日本における家族形成のパターンと要因

## Patterns and Factors of Family Building in Preindustrial Northeastern Japan

津谷典子（慶應義塾大学）・黒須里美（麗澤大学）

Noriko Tsuya (Keio University), Satomi Kurosu (Reitaku University)

Email: tsuya@econ.keio.ac.jp

本報告は、近世東北日本における家族形成のパターンと要因について、18～19世紀の奥州二本松藩の3村（下守屋村、仁井田村、日出山村）の人別改帳より構築されたマイクロデータを用いて実証分析することを目的とする。二本松藩は現在の福島県の中央部に位置し、これら3村は家族農業を基盤とする農村であった。とはいえ、ほぼ全員が農業に携わっていた下守屋村と仁井田村とは対照的に、日出山村は18～19世紀に急速に発達した在郷町である郡山からわずか3kmの場所に位置し、郡山の発展に伴って都市化し郊外化した。現存する人別改帳は、下守屋村では1716～1869年（うち欠年9年）、仁井田村では1720～1870年（うち欠年5年）、そして日出山村では1708～1870年（うち欠年36年）であり、徳川時代の後半をほぼ網羅する人口史料が存在する。さらに、これら3村の人別改帳は現住地ベースで毎年調査され、欠年や理由不明の記録消失が少ないことから、非常に質の高い史料であると言える。報告者は既に下守屋村と仁井田村について人口再生産のパターンと要因に関する実証分析を行っており（Tsuya and Kurosu 2010）、本報告ではこれら2村に都市化とプロト工業化のより進んだ日出山村を加えて比較分析することにより、社会経済コンテクストの家族形成への影響を探る。

### 1. 分析データとモデル

本報告では、上記人別改帳に記録された女性の人年（woman year）を単位としたフラットファイルを構築し分析に用いる。これら3村は早婚かつ皆婚であり、特に女性でその傾向が強かった。そのため、家族形成の開始も早い傾向がみられることから、ここでは女性のライフコースにおける10～49歳を分析対象とする。このファイルは39,741人年（下守屋は13,601人年、仁井田は17,746人年、日出山は8,394人年）から成り、これらの人年は3,183人（下守屋は857人、仁井田は1,270人、日出山は1,056人）の女性から構築されている。また、このファイルには人別改帳に記録された3,270（下守屋は1,055、仁井田は1,565、日出山は650）の出生が含まれている。本報告で示す家族形成要因の多変量解析の被説明変数は当該1年間に未婚男女が初婚を経験するか否かであるため、離散時間（discrete-time）イベントヒストリー分析モデルを用いる。

### 2. 家族形成のパターン

家族形成のパターンについて、上記の宗門改帳に記録された出生（registered births）をベースとした「出生率」を算出し、その水準を全出生児および男女別にみると、これら二本松藩3村の出生率水準は約2.8～3.2と非常に低いことがわかる。人別改帳や人別改帳などの近世日本の人口史料には2回の連続するお調べの間に出生し死亡した乳児は記録されない

ため、ここで分析に用いる記録された出生は実際の出生より過少に報告されている。先行研究によりこの実際と記録との差異は約 18%と推計されており (Tsuya and Tomobe 1998)、この過少分を調整すると 3 村の TFR は 3.4~3.9 となるが、それでも低水準であることに変わりはない。

さらに、出生率を (分子となっている) 出生児の性別にみると、TFR の性比 (女兒の率を 100 とした場合の男児の率) には村間の差異がみられる。下守屋では TFR の性比は 100 (男女同率) であるのに対し、仁井田では 110 と男児の出生率が 10% 高く、一方日出山では 92 と女兒の出生率が 8% 低くなっている。事実、記録された出生の性比をみると、3 村の合計では 108 と通常値の幅 (104~107) にほぼ収まる水準であるが、村別にみると、下守屋は 100、仁井田は 112、そして日出山は 93 と差異が大きく、日出山と下守屋の出生時の性比は通常値より低く (特に日出山は目立って低く)、一方仁井田は高い。

そこで、生存する息子と娘の数 (当該出生からみた場合の生存する兄と姉の数) 別にみた出生の性比を算出することにより、3 村の家族形成のパターンをさらに詳しくみてみたい。まず、生存する息子がいない場合、生存する娘の数がゼロから 1 人そして 2 人以上に増えるに従って、3 村全体の出生時の性比は 88、126、そして 194 へと急激に増加する。つまり、生存する子どもがいない夫婦の場合、出生の性比は 88 と通常値よりずっと低く、これは記録された男児出生数が女兒出生数に比べて不自然に少ないことを意味している。しかし、生存する息子のいない夫婦では娘の数が増えるに従って、出生の性比は通常値をはるかに超える高水準に大きく上昇していることから、1 人 (最初に) 娘を確保した夫婦は次に息子をもつ傾向が非常に強かったことがわかる。ここから、これら 3 村では (生存する) 子供数とその性別構成による家族形成パターンの意図的抑制が広く行われていたことが示唆される。

さらに、この生存する息子の数と娘の数別の出生性比を村別にみると、生存する子どもがだれもない場合の出生性比は仁井田が 97 であるのに対し、下守屋では 88、日出山では 82 と後者 2 村で目立って低い。さらに、生存する息子はいるが娘が 1 人いる夫婦の出生の性比は仁井田では 130 であったのに対し、下守屋では 119、日出山では実に 86 と大きな差異がみられる。このような村間の差異により、出生の性比が仁井田では 112 と高く、一方日出山では 93 と低いことにつながっていることが示唆される。

これら近世東北 3 村の家族形成の決定構造を分析するため、本報告では、①女性の年齢や初婚年齢など女性の人口学的属性、②生存する子の数と性別構成など子どもの属性、③戸主との続柄や親との同居など世帯の属性、④世帯の持ち高や地域の経済状況などの経済的属性を共変量として用いてイベントヒストリー分析を行う。この結果は大会で報告する。

#### 参考文献

Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu. 2010. "Family, Household, and Reproduction in Northeastern Japan, 1716-1870," Pp. 249-285 in Tsuya, Noriko O. et al., *Prudence and Pressure: Reproduction and Human Agency in Europe and Asia, 1700-1900*. Cambridge, MA: MIT Press.

Tsuya, Noriko O. and Ken'ichi Tomobe. 1998. "Infant Mortality and Underregistration of Births in a Nineteenth Century Japanese Village: An Analysis of Pregnancy Registers," Paper presented to the International Symposium on Nuptiality and Family Formation in Comparative Eurasian Perspective, Beijing, China, Nov. 25-29.